私と医療

New Med Essay ―第100回

チーム医療のモデルを目指して

「人のお世話をする仕事がしたい」、そんな思いで私は開業医になった。汗をふきふき患者さんのお宅を往診する姿が、私にとっての医師の姿だった。私は、その思い描く医師像を実現すべく、1994年多摩センターに一人診療所を開業した。現在は、複数の専門医が集まった大型クリニックを持つ「めぐみ会」を運営している。

私は、病院に行かなくてもクリニックにちゃんと専門の医師がいて、「そこで診てもらえれば大丈夫」と信頼してもらえるような外来の診療レベルを維持しなくてはならないと思っている。それが、私の求めるクリニックのあり方だ。そのレベル維持の1つの手段として私が出した答えは、外来には各分野の専門医を揃え、複数の医師による診療体制をとることである。

1人の医師が複数診療科の専門医になるというのは現実的には難しく、対応できることには限界がある。1つのクリニックに糖尿病・呼吸器疾患・消化器疾患・心臓疾患・血液疾患などさまざまな分野の専門医が揃っていれば、入院による検査や手術を必要としない病気については、他の病院に紹介することなく、ほぼ自院のみで医療サービスがまかなえる。そのため、患者さんは長い時間をかけて都心の大病院へ行く必要はない。

そして、医師がチームで診療を行うことで、クリニックで対応できる専門分野が広がるだけでなく、日中の往診時間を確保することができるし、日曜・祝日も含め年中無休の診療が行えるようになる。働く医師にとっても、自己犠牲を強いられることなく、患者さんのニーズに応え、本来医師が果たすべき職務に専念しながら、ワークライフバランスも確保しやすくなる。

このチーム医療は、在宅医療や災害救援医療の場面でも大いに威力を発揮する。めぐみ会の本院である田村クリニックは、約200名の在宅患者さんを訪問診療しているが、往診専門医は置かず、複数の医師が担当曜日を決めて、往診をしている。

このシステムが機能しているのは、訪問看護師やケアマネジャーが全体のコーディネーターとして、このチームをバックアップしているからである。

本院・南大沢在宅の集合写真

チーム医療のシステムが充実すれば、一人診療所ではできないことも可能である。

めぐみ会では、複数診療体制であったため、先の東日本大震災では、職員を含めた30名ほどのチームを組んで被災地へ医療支援に行くことができた。

これはまだロマンの段階であるが、例えば、医師不足に悩む医療過疎地域の診療を、めぐみ会の医師が交代で担っていくということも可能になる。

患者さんの要求する質の高さ、これからさらに必要性が増す在宅医療などを考えると、これからは、個人診療ではなく、チーム診療が求められる時代になるだろう。

世の中の変化に対応できる、機動力のある医療機関をつくることが私の夢である。在宅医療、災害医療ボランティア、地域連携など、課題はたくさんある。志を同じくする皆さんとともに、これからの地域医療のモデルを作っていくこと。それが、私のライフワークだと思っている。

医療法人社団めぐみ会 理事長

田村 豊（たむら・ゆたか）

東京近郊の多摩ニュータウンをはじめ、都内6つの地区に10の「総合型クリニック」を展開する医療法人めぐみ会理事長。

1956年 静岡県生まれ。
1980年 京都大学法学部卒業。
　　2年間会社員生活を送る。
1989年 岐阜大学医学部卒業。
　　徳洲会病院、国立がんセンター、新東京病院、三井記念病院等の内科（特に消化器や肝臓）専門医を経て
1994年 田村クリニックを東京都多摩市に開業。
1996年 医療法人社団めぐみ会を設立。
2012年 多摩市医師会会長就任。
　　現在に至る。